

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの

——「理」と「知」の用法を中心にして——

埋 田 重 夫

〔一〕 序

白居易は傑出した作家（詩人）であると同時に一流の批評家（文藝理論家）であつた。生涯に編纂した數多くの別集・總集・唱和集・類書の存在はその事實を雄辯に物語っている。詩文の入選落選や文獻の取捨選擇には、必然的に高い見識と鋭い批評眼が要求されるからである。彼の詩に廣く認められる情と理の交差も、この點に關係してまことに興味深い。生來的に論を好む白居易にとって自己の詩文は、揺れ動く「情」を「抒」べ、かくあるべき「理」を「説」き、人生における指針を再確認するものとしてあり續けたようである。

今回の論考ではこの説理的抒情性に注目し、彼の詩歌作品に現れる「理」と「知」の用法について考察を進めてみたい。

こうした觀點からの分析は、自ずと作家における詩作の意義という問題に關連するであろうし、また中唐詩一般に認められる傾向にも言及することになる。感情を燃焼させることに積極的な盛唐詩の作風は、白居易という一つの個性の登場によつて、情念の氾濫を理論的に統御し、そこから自らの生に次々と意味（「理」）を生み出していく新たな詩風へと轉換していく。換言すればそれは、「抒情の器」たる詩歌に「賦活の具」なる機能を累加し強化していく文學活動であつたと言える。生活日誌的作風と評されることの多い白居易は、自己の日常を詩中で點檢し相對化することで、情念の暴走を回避し、そこから生じる苦悶や憂愁を輕減し超克することに成功している。以下の各節では、この問題を個々の觀點に即してさらに詳しくみていきたい。

〔二〕 先行文獻に見られる指摘

白居易と説理性の問題を提起した最も初期の文獻は、松浦友久「白居易における陶淵明——詩的説理性の繼承を中心に」(『上・下』)(『中國詩文論叢』第五集・第六集、一九八六年六月・一九八七年六月)(後に松浦友久著作選Ⅱ『陶淵明・白居易論——抒情と説理』(研文出版、二〇〇四年六月)に収録)である。白居易が陶淵明から多大な影響を受けているという事實は、中國批評文學史における定説となっている。ここでは、白詩と陶詩を直接に繋ぐ發想の基調が「詩的説理性」であることを論證するとともに、そのような説理と抒情が融合した「説理的抒情性」の表現効果についても説明を加えている。

論文の前半では、白居易における陶淵明への言及狀況を踏まえ、陶詩の説理性の検討が中心に置かれる。陶淵明の代表作品の詠法分析、孫綽の玄言詩との比較考察によつて、説理詩独自の「説理的抒情効果」(知的に統御された持續的情念)が解明され、この詩的説理の系圖として陶淵明⁽¹⁾・杜甫⁽²⁾・白居易・蘇軾という水脈を提示している。

論文の後半では、白詩における説理性の諸相が詳しく取り上げられる。儒家思想のなかの對他的・社會的理念の表出で

ある「諷諭的説理性」、道家・儒家・佛家思想のなかの對自的・個人的理念の表出たる「閑適的説理性」、という二つの分野を考察對象に設定し、白氏にとつての陶詩的説理の繼承は、明らかに後者であると歸納する。さらに結語では、この對自的閑適的説理の領域においても、陶白詩の間には「見逃しがたい差異」があるとして、閑境を實感しつつも適境を實感し得ない陶淵明、閑境・適境はもとより官適・忙適の境地さえも主體的に實感し得る白居易、という二人の鮮烈な詩人像を提出している。

また土谷彰男「理」の諸相——「是非」の價值對立における陶淵明、韋應物、白居易の異同」(『中國詩文論叢』第二十一集、二〇〇二年十二月)では、前述の松浦論文の趣旨を踏襲しつつ、三人の詩中に現れる「是・非」「得・失」「榮・辱」「生・死」「閑・適」などの價值對立に注目し、そこで「理」がどのような機能しているかを分析している。論點は複數に涉つているが、ポイントとなる主張はほぼ以下の三つに絞られる。

〔A〕陶淵明にとつて價值の對立は、既に世俗のなかで嚴然と固定された否定しがたいものであり、そのような價值對立から回避し敢えて關知しようとしなない姿勢が認められ

る。それ故に「飲酒」という行爲も、それらの對立に關與しないことへの擔保となつてゐる。淵明における「理」は、世俗を強く支配している不可變な原理であると理解できる。

[B] しかし韋應物にあつては、對立するかに見える價值は常に轉倒する可能性を帶びた流動的なものであり、そのような價值對立に際しては、對立の根底に潜む「理」を捕捉し、その「理」を踏まえた對象認識によつて、理知的に對處しようとする。そこでは「飲酒」の擔保は「理」によつて乗り越えられている。應物にとつての「理」は、己れと共有できる連續した根本原理として認識されるものである。

[C] 「理」による價值對立の超克は白居易に至つて、自己に内在する「適」に取つて變えられる。自己の内縁には自足自適の境地を築き、價值對立は自己の外縁へと押しやられる。ここにおいて「飲酒」は自適の念が促される契機の一つにしか過ぎなくなる。居易は「生死」の根本的對立も「閑適」によつて乗り越えようとする。

兩論文に共通する特色は、説理詩の系譜に陶淵明↓(韋應

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの(埤田)

物)^③ ↓白居易を設定し、それぞれの異同を析出してゐることである。陶淵明に認められる當初の固定的な「理」への認識は、韋應物から白居易へと連なる軌跡で、より彈力的な活用へと變化し、その關鍵に白氏提唱の「閑適」概念があることを指摘する。ここではこれら先行研究の成果を踏まえつつ、さらに白詩に詠われる「理」の用法を取り上げ、この詩人の説理のあり方について再度確認しておきたいと思う。

(三) 問題の所在

白居易的な詩情や詩境が一體何であるのかについては、唐宋以來の白詩受容史において實にさまざまな議論がなされてきた。「平易」「淺近」「俚俗」「淫言嫖語」「條理井然」「廣大教化主」などの評語は、その一部に過ぎない。正と負の評價はそれぞれ錯綜しているが、白詩を白詩たらしめている重要な要素に、もし情の過多と理への拘泥があるとするならば、この屬性こそは彼の作品に獨特の趣を與えていると推測される。この種の詩篇を先ず二首紹介してみたい。何れも『白氏文集』の「前集」五十卷本に收録される五言古體詩である。

①「梁上有雙燕、翩翩雄與雌。銜泥兩椽間、一巢生四兒。

四兒日夜長、索食聲孜孜。青蟲不易捕、黃口無飽期。觜爪雖欲弊、心力不知疲。須臾十來往、猶恐巢中飢。辛勤三十日、母瘦雛漸肥。喃喃教言語、一一刷毛衣。一旦羽翼成、引上庭樹枝。舉翅不迴顧、隨風四散飛。雌雄空中鳴、聲盡呼不歸。却入空巢裏、啁啾終夜悲。燕燕爾勿悲、爾當返自思。思爾爲雛日、高飛背母時。當時父母念、今日爾應知。」〔燕詩示劉叟〕〔041〕。

②「三月三十日、春歸日復暮。惆悵問春風、明朝應不住。送春曲江上、眷眷東西顧。但見撲水花、紛紛不知數。人生似行客、兩足無停步。日日進前程、前程幾多路。兵刃與水火、盡可違之去。唯有老到來、人間無避處。感時良爲已、獨倚池南樹。今日送春心、心如別親故。」〔送春〕〔0487〕。

①は『詩經』邶風「燕燕」⁽⁵⁾以來の詩的心象を繼承しながら、(つがいの燕と巢作り) ↓ (四羽の雛の誕生) ↓ (雛の養育と親の苦勞) ↓ (雛への教育と親の愛情) ↓ (巢立ちによる突然の離別) ↓ (子を喪失した親の悲嘆) ↓ (諷諭詩としての作者の發言) という小説的な構想を採っている。ここには叙事と説理が分かち難く結び附いており、平易な詩語の多用、

確かで無理のない構成力、情理への深い理解など、白樂天風の詩歌世界を體現している。終末六句で開陳される理の重さは、一夏における燕夫婦の物語(叙事性)を前提にしてはじめて実感し得るものであろう。

②は惜春を主題とする感傷詩の代表作であり、(三春) ↓ (季春) ↓ (三月三十日) ↓ (夕刻) と時間を徐々に絞り込みながら、春の最後を見送る詩人の複雑な感慨を述べたもの。前半八句の克明な風景描寫(叙景性)は、その後に續く説理を自然かつ効果的に導き出している。「人生似行客、兩足無停步」「兵刃與水火、盡可違之去」「唯有老到來、人間無避處」などの句は、白居易獨自の詩情を表現しており、それは情と理が均衡を保って詠われる新たな個性の文學であつたと考えられる。

叙事と叙景が説理と緊密に連繫するこれら二首に併行して留意されるのは、抒情と説理の表出がほとんど一體化している作品群である。元和八年(八一三)四十二歳、下邳丁憂期に作られた「念金鑾子二首」〔0468〕〔0469〕(五古)は、その典型とも言うべきものである。

③「衰病四十身、嬌癡三歳女。非男猶勝無、慰情時一撫。」

一朝捨我去、魂影無處所。況念夭化時、嘔啞初學語。始知骨肉愛、乃是憂悲聚。唯思未有前、以理遣傷苦。忘懷日已久、三度移寒暑。今日一傷心、因逢舊乳母」〔念金鑾子二首其一〕⁽⁰⁴⁶⁸⁾。

④「與爾爲父子、八十有六旬。忽然又不見、邇來三四春。形質本非實、氣聚偶成身。恩愛元是妄、緣合暫爲親。念茲庶有悟、聊用遣悲辛。暫將理自奪、不是忘情人。」〔念金鑾子二首其二〕⁽⁰⁴⁶⁹⁾。

金鑾は、白居易が三十八歳の時に授かった初子である。「金鑾」という名は、長安の大明宮内にあった「金鑾殿」に由来する。しかしその名とは裏腹に、この娘はようやく言葉を話し始めた可愛い盛り、僅か三歳で夭折してしまう。長女に寄せる父親の深い愛情は、「金鑾子晬日」⁽⁰⁴¹³⁾（元和五年・三十九歳・長安）「病中哭金鑾子小女子名」⁽⁰⁷⁷⁶⁾（元和六年・四十歳・下邳）「重傷小女子」⁽⁰⁸²⁴⁾（元和十年・四十四歳・長安）三篇の存在からも十分に窺うことができる。「衰病四十身、嬌癡三歳女」「一朝捨我去、魂影無處所」「與爾爲父子、八十有六旬」「忽然又不見、邇來三四春」の数字表現からは、居易と金鑾の死別離が突然であったことがわかる。それから三年の歳月が

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの（埋田）

流れたある日、曾ての乳母との偶然の出会いが、本詩を制作する直接の契機になつてゐる點も注意されてよいであろう。

亡き我が子への追憶を詠う内容以上に、「念金鑾子二首」がとりわけ注目されるのは、詩中に「理」字が二回使用され、なおかつ一首全體の詩想が人情と道理の闘ぎ合いに準據してゐるからである。連作詩其一では、「始知骨肉愛、乃是憂悲聚」（あの子を失つてようやく理解したのは、骨肉の愛が畏れと哀しみの集合體に他ならないということ）と述べ、「唯思未有前、以理遣傷苦」（彼女がまだ生まれていなかった頃をひたすら思い起こし、その理に縋ることで自分を損ない苦しめる悲哀の情を追い拂おうとした）と説く。ここでは對象喪失への畏怖こそが「愛」の原義であり、それ故にこの子は最初から誕生しなかつたのだという「理」が援用されている。三歳の愛娘を失う耐え難い苦痛は、そのように自らを無理に納得させることで、確かに軽減し鎮靜化されている。愛惜の情はひとまず凍結され、辛い記憶は遠くの風景に後退していく。まさしく「忘懷日已久、三度移寒暑」である。換言すればこれは、不條理で不本意な出來事を理知の力によつて乗り越えていく作業とも言える。

この種の白居易的な自律の理は、連作詩其二においてなお一層顯著である。ここでは「形質本非實、氣聚偶成身。恩愛

元是妄、緣合暫爲親」(人の肉體はもともと實體のあるものではなく、氣が集まつてたまたま身體を形成しているだけなのだ。だとするならばそこに宿る恩愛の情は素より妄念であり、幾つかの縁が重なつてほんの一時だけ親子の關係をなしているに過ぎない)と説明し、この佛家的な「理」をいつも心に思うことで悟境に近づき、悲辛を打ち拂い、自己を取り戻そうとする。そしてそれでもこのような「理」に没入し切れない詩人の思いは、最終末句の叫び「不是忘情人」に集約されている。本稿で白居易を情理の詩人と捉える所以である。

以上紹介してきたように「念金鑾子二首」には、白居易文學が持つ特徴的な性格が色濃く投影されている。一般に中國文學で「宋詩說理」の評語は、抒情の枯渇などの否定的な意味で使用されるが、白詩には說理と抒情が虚實皮膜的なバランスで融合しており、それは作者にとつてほとんど確信的な詠法であつたと考えられる。この說理的抒情性に加えて「始知」を初めとした常用表現の存在は、詩人にとつて詩作が、自分の人生における深刻な問題を検討し確認する必須の営みに他ならなかつた事實を示唆している。そしてそれは結果として、白居易の身心を慰藉し蘇生させる大きな據り所にもなっているはずである。次節ではこれらの點を白詩の他の作品で

詳細に檢證してみたい。

〔四〕白居易詩における「理」

道理や條理を意味する名詞用法の「理」について、白詩中に詠われる全用例^{〔7〕}を檢索し考察することは、從來の白居易研究においてほとんどなされていない状況にある。本節では、最初に「理」字を含む作品三十三首の詩題・詩型〔文體〕・年齢・場所を掲出してみたい。なお引用は時系列に據る。

- (1) 「雲居寺孤桐詩」〔011〕(五古・三十五歳から四十歳・長安)
- (2) 「杏園中棗樹」〔0056〕(五古・三十六歳から四十四歳・長安)
- (3) 「白牡丹和錢學士作」〔0031〕(五古・三十七歳から四十歳・長安)
- (4) 「讀鄧魴詩」〔0448〕(五古・三十七歳から四十歳・長安)
- (5) 「和答詩十首并序」〔0100〕(序文・三十九歳・長安) (6) 「代書詩一百韻、寄微之」〔0608〕(五排・三十九歳・長安) (7) 「歸田三首其三」〔0246〕(五古・四十一歳・下邳) (8) 「効陶潛體詩十六首并序其十三」〔0225〕(五古・四十二歳・下邳) (9) 「効陶潛體詩十六首并序其十六」〔0228〕(五古・四十二歳・下邳) (10) 「念金鑾子二首其一」〔0468〕(五古・四十二歳・下邳) (11) 「念金鑾子二首其二」〔0469〕(五古・四十二歳・下邳) (12) 「渭村退居、

- 寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩一百韻」〔0807〕（五排・四十三歲・下邳）（13）「文柏牀」〔0060〕（五古・四十四歲から四十七歲・江州）（14）「江樓夜吟元九律詩成三十韻」〔1009〕（五排・四十六歲・江州）（15）「齊物二首其一」〔0322〕（五古・四十六歲から四十七歲・江州）（16）「達理二首其一」〔0331〕（五古・四十七歲・江州）（17）「達理二首其二」〔0332〕（五古・四十七歲・江州）（18）「自到潯陽、生三女子、因詮眞理、用遣妄懷」〔1087〕（七律・四十七歲・江州）（19）「江州赴忠州、至江陵已來、舟中示舍弟五十韻」〔1104〕（五排・四十八歲・江州至忠州途中）（20）「桐花」〔0541〕（五古・四十八歲・忠州）（21）「重詠」〔2482〕（五律・五十五歲・蘇州）（22）「有感三首其一」〔2227〕（五古・五十五歲から五十六歲・蘇州至洛陽途中）（23）「和微之詩二十三首并序」〔2250〕（序文・五十七歲・長安）（24）「書紳」〔2299〕（五古・五十九歲・洛陽）（25）「哭崔常侍晦叔」〔2966〕（五古・六十二歲・洛陽）（26）「寄盧少卿」〔2982〕（五古・六十三歲・洛陽）（27）「吟四雖雜言」〔2986〕（雜古・六十三歲・洛陽）（28）「早服雲母散」〔3130〕（七律・六十三歲・洛陽）（29）「覽鏡喜老」〔3008〕（五古・六十四歲・洛陽）（30）「偶作二首其二」〔3028〕（五古・六十四歲・洛陽）（31）「因夢有悟」〔3034〕（五古・六十四歲・洛陽）（32）「戒藥」〔3526〕（五古・六十八歲・洛陽）（33）「山中五絕句其三、林下檣」〔3477〕（七絕・六十九歲・

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの（埋田）

嵩山。

全體の傾向であるが、三十五歲から六十九歲までほぼ間斷なく制作されており、創作場所も洛陽（九首）長安（七首）下邳（六首）江州（六首）忠州（二首）蘇州（一首）嵩山（一首）旅次（二首）となつてゐる點が留意される。また採用詩型は五古（二十二首）五排（四首）七絕（二首）五律（一首）七律（一首）であり、五言古體詩の突出が特に注目されよう。中國韻文史における各種詩型と表現機能の觀點に即して言えば、五言古體詩は儒家・道家・佛家など、これらの思想や理念を表現するのに最も高い適性を持つ詩型であつた。五古が有する說理的表現との適合性は、白居易の詩歌作品にあつても明確に認められる。

前述三十三首のなかで最初に取り上げたいのは、詩題中に「眞理」「達理」を含む純粹な說理詩である。三首何れも江州司馬時代の作。

⑤「宦途本自安身拙、世累由來向老多。遠謫四年徒已矣、晩生三女擬如何。預愁嫁娶眞成患、細念因緣盡是魔。賴學空王治苦法、須拋煩惱入頭陀。」（「自到潯陽、生三女子、

因詮眞理、用遣妄懷」〔108〕。

⑥「何物壯不老、何時窮不通。如彼音與律、宛轉旋爲宮。我命獨何薄、多悴而少豐。當壯已先衰、暫泰還長窮。我無奈命何、委順以待終。命無奈我何、方寸如虛空。蒼然與化俱、混然與俗同。誰能坐自苦、齟齬於其中。」〔達理二首其二〕〔0331〕。

⑦「舒姑化爲泉、牛哀病作虎。或柳生肘間、或男變爲女。鳥獸及水木、本不與民伍。胡然生變遷、不待死歸土。百骸是己物、尙不能爲主。況彼時命間、倚伏何足數。時來不可、命去焉能取。唯當養浩然、吾聞達人語。」〔達理二首其二〕〔0332〕。

娘の喪失體驗に根ざした「念金鑾子二首」〔0468-0469〕とは逆に、⑤は江州「潯陽」に左遷された失意のなかで、「三女子」の誕生を複雑な感慨とともに詠った七言律詩である。『白氏文集』には居易の子供として、金鑾（長女、夭折）阿羅（次女、談弘謨の妻、引珠・玉童の母）崔兒（長男、夭折）が登場するが、本詩および「初除尙書郎、脫刺史緋」〔1175〕（元和十五年・四十九歳）の記述——無奈嬌痴三歳女、繞腰啼哭覓銀魚——から、これ以外にも數人の女子がいたことがわかつてゐる。〔遠謫〕の

地で次々と生まれた娘に對する責任と不安は、「預愁嫁娶眞成患、細念因緣盡是魔」の二句に明白である。ここで親子となる「因緣」を「魔」と捉える屈折した感情は、權力の中樞である長安から遠く貶謫され、經濟的にも全く見通しが立たず、知命五十の年齢を目前に控えた衰老のなか、嫡男ではなく女兒達を抱え込んでしまったという複數の家庭事情に起因しているであろう。詩題に見える「因詮眞理、用遣妄懷」は、既にそのことを表している。焦燥感にも似た思いを自分なりに納得させるためにこの詩は作られており、そして彼が情と理を絡め合わせて出した結論（對處）は、終末二句の「賴學空王治苦法、須拋煩惱入頭陀」であつたのである。佛理への傾斜は江州司馬になり、廬山僧との交流を通して急速に進むが、この詩篇にはその特色が強く認められる。佛教の信仰以上に詩の言語は、白居易の「妄懷」「煩惱」を晴らす有効な手段であつたと言わねばならない。

元和十年（八一五）の六月に突如發生した宰相武元衡暗殺事件は、結果として白居易を首都から遠く離れた江州へと追い遣ることになった。官僚としての正義感や使命感から憲宗へ提出した上奏文が、現任の左贊善大夫職に不釣り合いな越權行爲と糾弾されたのである。長安の政界に「新樂府五十首」

や「秦中吟十首」に對する反發が背景にあつたことは言うまでもない。數年間に及ぶ江州廬山での外任生活は、その多くが前半生への總括と内省のために費やされた。そしてこの挫折と屈辱をばねとして、自己の命運を眞劍に考える詩篇が生産されていく。⑥⑦の「達理——理に達す」二首は、この政治的に不遇な江州時代に詠出された説理詩である。

兩首ともに「時命」は管理できず、また轉變極まりないことを説き、その絶對条件下でどう生きるべきかが模索される。「其二」の「我無奈命何、委順以待終。命無奈我何、方寸如虛空」では「我」と「命」の關係が相對化され、『莊子』知北遊篇を典故とする「委順」が提示される。「其二」の「百骸是己物、尙不能爲主、況彼時命間、倚伏何足數」では、己が身體ですら十分に統御できないのだから、運命の吉凶禍福に到つては言うまでもないと述べ、『孟子』公孫丑上篇が首唱する「浩然」の氣を「養」い、「義」と「道」を守つて生き抜く決意が示される。作詩によつて人生の境遇が直ちに改善するわけではないが、對象への知的な理解や認識は、現狀に不満や苦惱を抱える詩人にとって確かに大きな生きる力になつたのである。ここには、情を手懷け管理する詩人像が顯現している。

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの（埤田）

この種の自己の本分を守り、他者の榮光を氣にかけず、天命に委ねて誇り高く生きていく姿勢は、「盡生生理——生を生かす理を盡くす」の言葉によつても裏附けられる。當該表現を含む二首を參考までに引用する。

⑧「人言百果中、唯棗凡且鄙。皮皴似龜手、葉小如鼠耳。

胡爲不自知、生花此園裏。豈宜遇攀翫、幸免遭傷毀。二月曲江頭、雜英紅旖旎。棗亦在其間、胡嫫對西子。東風不擇木、吹煦長未已。眼看欲合抱、得盡生、生理。寄言遊春客、乞君一迴視。君愛繞指柔、徒君憐柳杞。君求悅目艷、不敢爭桃李。君若作大車、輪軸材須此。」（杏園中棗樹詩）（0056）。

⑨「酒酣後、歌歇時。請君添一酌、聽我吟四雖。年雖老、猶少於韋長史。命雖薄、猶勝於鄭長水。眼雖病、猶明於徐郎中。家雖貧、猶富於郭庶子。省躬審分何僥倖、值酒逢歌且歡喜。忘榮知足委天和、亦應得盡生、生理。」（吟四雖）（2986）。

人々から注目されない不細工な棗の樹は、材質の堅固さ故に馬車の輪軸に用いられる比喻によつて、國家有用の士に不

可缺な器量に言及する⑧。「年老」「命薄」「眼病」「家貧」という現況への不満を、自分よりもつと不幸な周邊の人々と比較することにより少なくし、「榮を忘れ足るを知り天和に委ねる」生き方を肯定してみせる⑨。ここには優れて白氏的な詩想（得失一體・比較比定・知足安分・樂天知命）が展開されており、それは自他の生を生かし切る處世の理であつたと言える。

次に検討しなければならないのは、用例数が最も多い「此理」表現を有する作品群である。總計で八首九例に達しており、量的にも狹義の白居易說理詩の中核を占めている。詩人の薄命は計數に巧みな人でも推測できないと歎く「讀鄧魴詩」⁽⁰⁴⁴⁸⁾、官人としての身邊環境が十年で激變してしまつたことを詠う「歸田三首其三」⁽⁰²⁴⁶⁾も注目されるが、ここで特に留意したいのは、白居易の世界觀を眞正面から取り上げる複數の詩篇である。

⑩「青松高百丈、綠蕙低數寸。同生大塊間、長短各有分。長者不可退、短者不可進。若用此理推、窮通兩無悶。」

（「齊物二首其二」⁽⁰³²²⁾）。

⑪「名無高與卑、未得多健羨。事無小與大、已得多厭賤。如此常自苦、反此或自安。此理知甚易、此道行甚難。勿

信人虛語、君當事上看。」（「偶作二首其二」⁽³⁰²⁸⁾）。

⑩では百丈の松と數寸の蕙に取材して、その「長と短」は各々に「分」があるとし、「長者不可退、短者不可進」（長いものは短くできず、短いものは長くできない）と分析する。そしてこの道理に照らせば、人生の「窮と通」もそれぞれ煩悶するに及ばないと結論づける。いわゆる『莊子』齊物論の哲理——萬物齊一の理——に據つて、江州左遷がもたらす不遇不適の感情を和らげようとしていることが理解される。

白居易の思考は徹底した對偶によつて支えられており、世界のあらゆる事象は複眼的に分割され對比される。彼における情と理の對照も當然この延長線上にあると考えてよい。分解された一つ一つの要素は自己解說的に究明され、最後にもう一度統合され、自ら納得する形で意味づけられるのである。この白氏特有の思考様式は⑪の「偶作」詩にも極めて明瞭に現れている。ここでは「名と事」「高と卑」「未得と已得」「健羨と厭賤」「自苦と自安」「知と行」「易と難」といった具合に、自ら關心を持つ對象や狀態が細かく分類され、備に比較され検討されている。そのようにして紡ぎ出した「此理」に對する作者の信賴や確信は、終末二句の發言「勿信人虛語、君當

事上看」に繋がっていると考えてよいであろう。生を意味づけるという思索の流れは、白居易の詩歌に大量に認められるものであり、それはまたこの詩人にとって詩を作る行為が、人生の指針や生活の規準を手に入れるために、缺くべからざる手段であつたことを教えている。

詩中に「理」を含む純粹な説理詩は、母陳氏の喪に服していた貧困の下邳期、長安勤務の東宮職から潯陽の司馬へと貶謫された失意の江州期、中央政界から退休し履道里邸での閑適生活が中心となる獨善の洛陽期と、ほとんど絶えることなく繼續して制作されている。そしてまた作品で繰り広げられる「理」の詩想も、人生の蹉跌や辛酸を経験することで、一層深みを増している。この意味で最晩年に洛陽で創作された次の四首は、白居易の説理詩における一つの到達點を示していると言えなくもない。六十三歳から六十六歳までの間に詠われた詩篇であり、何れも自己の死生觀を眞劍に追求している點が注意される。

⑫「老誨心不亂、莊誠形太勞。生命既能保、死籍亦可逃。嘉肴與旨酒、信是腐腸膏。艷聲與麗色、眞爲伐性刀。補養在積功、如裘集衆毛。將欲致千里、可得差一毫。心不

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの（埤田）

亂、形太勞至差一毫、皆出老莊及諸道書仙方禁誡。顏回何爲者、簞瓢纔自給。肥醲不到口、年不登三十。張蒼何爲者、染愛浩無際。妾媵填後房、竟壽百餘歲。蒼壽有何德、回夭有何辜。誰謂具聖體、不如肥瓠軀。遂使世俗心、多疑仙道書。寄問盧先生、此理當何如。」（寄盧少卿〔2982〕）。

⑬「今朝覽明鏡、鬚鬢盡成絲。行年六十四、安得不衰羸。親屬惜我老、相顧興歎咨。而我獨微笑、此意何人知。笑罷仍命酒、掩鏡捋白髭。爾輩且安坐、從容聽我詞。生若不足戀、老亦何足悲。生若苟可戀、老即生多時。不老即須夭、不夭即須衰。晚衰勝早夭、此理決不疑。古人亦有言、浮生七十稀。我今缺六歲、多幸或庶幾。儻得及此限、何羨榮啓期。當喜不當歎、更傾酒一卮。」（覽鏡喜老〔3008〕）。

⑭「交友淪歿盡、悠悠勞夢思。平生所厚者、昨夜夢見之。夢中幾許事、枕上無多時。欸曲數盃酒、從容一局棋。初見韋尚書、金紫何輝輝。中作李侍郎、笑言甚怡怡。終爲崔常侍、意色苦依依。一夕三改變、夢心不驚疑。此事人盡怪、此理誰得知。我粗知此理、聞於竺乾師。識行妄分別、智隱迷是非。若轉識爲智、菩提其庶幾。」（因夢有悟〔3034〕）。

⑮「促促急景中、蠢蠢微塵裏。生涯有分限、愛戀無終已。早夭羨中年、中年羨暮齒。暮齒又貪生、服食求不死。朝吞太陽精、夕吸秋石髓。徼福反成災、藥誤者多矣。以之資嗜慾、又望延甲子。天人陰陽間、亦恐無此理。域中有眞道、所說不如此。後身始身存、吾聞諸老子氏。」（「戒藥」^{〔3526〕}）。

⑫は『老子』第三章と『莊子』在宥篇の教戒に従つて、長命を保つ具體的方法を提示した上で、孔子の高弟である顏回（『論語』雍也・先進）と前漢の官僚であつた張蒼（『史記』卷九十六張丞相列傳・『漢書』卷四十二張周趙任申屠傳）の生涯が比較される。前者は德行第一と讃えられながらも極貧のうちに早世し、後者は欲望の限りを盡くしつつも百歳以上の天壽を全うしている。二人の人生の不平等や理不盡について、白居易は「誰謂具聖體、不如肥瓠軀」と判定し、長壽延命のための修養を唱える巷間の仙道書が、如何に當てにならないかを知人の盧貞に問い掛けるのである。類似の主張は⑮の「戒藥」にも認められ、そこでは蟬聯體で「早夭羨中年、中年羨暮齒、暮齒又貪生、服食求不死」という世俗の風潮を描き、仙薬によつて不老不死を可能にする道理は、恐らくこの世の何處に

も存在しないだろうと述べる。そして最後に、「眞」に頼るべき「道」として『老子』第七章の所説「天長地久。天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生。是以聖人後其身而身先、外其身而身存。非以其無私耶。故能成其私」を掲げている。

以上概説してきた⑫⑮からも、晩年の白居易にとつて死生觀の確立は、緊急かつ深刻な課題であつたことがわかる。死生を巡る一連の考察は老莊思想ばかりでなく、當然ながら佛教觀念にまで及んでいる。⑭は今は亡き親友三人（韋弘景・李建・崔玄亮）と夢の中で次々と再會したことを取り上げ、その不思議な體驗を「識」「智」「菩提」の佛理から解説したものである。「因夢有悟」の詩題に加えて、「此理」の語が二度反復されていることも見逃せない。

このように人生に對する深い思索と内省は、確かに居易晩年の説理詩を豐饒なものにしたと考えてよい。「此理」を介在させて、歎老から喜老への鮮やかな反轉を詠う⑬「覽鏡喜老」は、説理と抒情の詩的心象が一つに融け合つた名作に位置づけられる。注目すべき説理の詩句を再度引用する。

生若不足戀、生若し戀ふるに足らざれば、
老亦何足悲。老も亦た何ぞ悲しむに足らん。

生若苟可戀、生若し苟くも戀ふ可くんば、
老即生多時。老は即ち生の多時なり。

不老即須天、老いざれば即ち須らく天すべし、
不夭即須衰。夭せざれば即ち須らく衰ふべし。

晚衰勝早夭、晩く衰ふるは早く夭するに勝れり、
此理決不疑。此の理は決して疑はず。

まさしく「老いは長い日月を生き抜いてこそ得られた結果であり、當に喜ぶべくして當に歎くべからざる」ものであるという確固たる信念に到達した⁽¹⁾のである。ここには喪失することと新たに獲得するという極めて白氏の詩想が表明されている。理の力によつて、「歎」なる感情は「喜」に變換され、最終句「更傾酒一卮」に象徵される飲酒酣醉の詩境へと連續している。白居易にとつて老いは、悲しみであるとともに喜びでもあったのである。⁽¹²⁾

最後に言及すべきは、「理」に修飾語が伴う作例である。確認できた用語には、「道理」四例「物理」三例「生理」二例「通理」「佛理」「常理」「事理」各一例があり、多用な説理表現が精力的に試行されている。「四面無附枝、中心有通理」(「雲居寺孤桐詩」(001))、「彼(屈平)憂而此(劉伶)樂、道理甚

白居易「念金鑾子二首」が意味するもの(埤田)

分明」(「効陶潛體詩十六首其十三」(0225))、「物理不可測、神道亦難量」(「同前其十六」(0228))、「老見人情盡、閑思物理精」(「江州赴忠州、至江陵已來、舟中示舍弟五十韻」(1104))、「彼來此須去、品物之常理」(「有感三首其一」(2227))、「徇俗心情少、休官道理長」(「重詠」(2482))などの詩句は、白氏が生きる意義や立脚點にどれほど拘泥し執着したかを證明している。白詩に登場する「理」は、生老病死全ての領域で詠われており、諱の居易と字の樂天が暗示する如く、處世のあり方そのものが白居易における究極の詩材であつたと判斷されよう。

〔五〕白居易詩における「知」

前節では「理」の諸相について一連の考察を行つたが、白居易における詩作と思索の關係でさらに看過できないのは、理解や會得を意味する動詞用法の「知」である。『白氏文集』七十一卷には、實に夥しい量の「知」の用例が認められる。これもまたこの詩人において、情と理が分かち難く結び附いていた事實を明示している。娘の死を悼む「念金鑾子二首其一」(0468)に、「始知骨肉愛、乃是憂悲聚」とあるのは、その證左に他ならない。「知」の常用表現は、現象の分析や論理の展開を経て自己確認へ到る文脈のなかで使われているだけ

に、その詠法を把握しておくことは、十分に意義があると考
えられる。二音節語に限定して白詩を調査すると、おおよそ
次のような結果になる。因みに「知」以外で目立つ用例は「始
覺」(九例)「始悟」(五例)となっている。

○「始知」(二十五例) ○「乃知」(十八例) ○「誠知」(十五
例) ○「方知」(十四例) ○「自知」(四例) ○「深知」(三
例) ○「定知」(二例) ○「已知」(二例) ○「遙知」(二例)
○「則知」(終知)「潜知」「苟知」「盡知」「纔知」「老知」
「唯知」(各一例) …… 總計九十三例

熟慮・決意・摩擦・抵抗などを經て次の事態が発生するこ
とを示す「始」「乃」「方」の多用が注目される。概してこれ
らの虚字が、前の段落の内容に對する重い語氣を含むからで
ある。日本語に翻譯すれば「はじめて・ようやく・やつと」
を理解した」に相當する。大集原本(前・後・續後集本)の體
裁をよく保存すると稱される『那波道圓本白氏文集』の内容
分類に沿いながら、自己確認の氣分を濃厚に持つ詩句の極一
部を引用してみたい。

①「……乃知王者心、憂樂與衆同。……」(「賀雨」(0001)・卷
一・諷諭)。

②「……彼因稀見貴、此以多爲輕。始知無正色、愛惡隨人
情。豈惟花獨爾、理與人事并。」(「白牡丹和錢學士作」(0031)・
卷一・諷諭)。

③「……心苦頭盡白、纔年四十四。乃知高蓋車、乘者多憂
畏。」(「閑居」(0234)・卷六・閑適)。

④「……四鄰尙如此、天下多夭折。乃知浮世人、少得垂白
髮。……」(「聞哭者」(0254)・卷六・閑適)。

⑤「……始知年與貌、衰盛隨憂樂。畏老老轉迫、憂病病彌
縛。不畏後不憂、是除老病藥。」(「自覺二首其一」(0483)・卷
十・感傷)。

⑥「……乃知性相近、不必動與植。」(「翫松竹二首其二」
(0575)・卷十一・感傷)。

⑦「……始知解愛山中宿、千萬人中無一人。」(「期李二十文
略・王十八質夫、不至、獨宿仙遊寺」(0647)・卷十三・律詩)。

⑧「……憂方知酒聖、貧始覺錢神。……」(「江南謫居十韻」
(1008)・卷十七・律詩)。

⑨「……方知宰生靈、何異活草木。……」(「喜雨」(2233)・卷
五十一・格詩歌行雜體)。

②5 「……始悟有營者、居家如在途。方知無繫者、在道如安居。……」〔「東歸」⁽³⁰²⁾・卷六十三・格詩〕。

②6 「……去者逍遙來者死、乃知禍福非天爲。」〔「詠史」⁽¹³⁾九年十一月作〕⁽³⁰³⁾・卷六十三・格詩〕。

②7 「……始知洛下分司坐、一日安閑直萬金。」〔「閑臥有所思二首其二」⁽³¹⁵⁾・卷六十五・律詩〕。

②8 「……馬死七年猶悵望、自知無乃太多情。」〔「往年稠桑曾喪白馬、題詩廳壁、今來猶存、又復感懷。更題絕句」⁽³²⁰⁴⁾・卷六十五・律詩〕。

卷六十五・律詩〕。

②9 「……夢中足不病、健似少年日。既悟神返初、依然舊形質。始知形神內、形病神無疾。形神兩是幻、夢寐非俱實。……」〔「夢上山時足疾未平」⁽³⁵³⁹⁾・卷六十九・半格詩〕。

一讀して政治・動植物・壽命・衰老・疾病・交友・飲酒・處世・事件・役職・身心など、「知」の認識對象が廣範圍に及んでいることが理解される。これらに單音節の「知」の用例（動詞と名詞）を合わせれば、人間世界のほとんど全ての事象が詠われていると言つてもよい。

「與元九書」⁽¹⁴⁸⁶⁾に「詩者、根情、苗言、華聲、實義」とあるように、詩が強い情動の發露であることは疑いない。白

居易「念金鑾子二首」が意味するもの（埋田）

居易は沸き立つ情念を理性的に統御すること、自らの身心の安寧を保っているように見受けられる。結論から言えば、胸中の情は、理を媒介にして言語化され、その結果として彼を人生の葛藤や矛盾から解放しているように觀察される。この詩人にとって詩を作ることは、自己確認であり自己統御であつたと言わねばならない。作詩の過程で意識の流れが知的に整理統合され、自分が十分に納得できる形で結論に辿り着いたとき、「始知」「乃知」「方知」「自知」「深知」……などの用語が選擇されるのである。この意味でこれら慣用表現は、白居易における詩作と思索の密接な關係を、最もよく表している。以上のことから、白居易を單純に哲理の詩人と規定するのは、必ずしも正鵠を射ていないであろう。一見恬淡に見える説理表現の背後には、激しい情念が湧出しているからである。白居易はまさしく情と理の詩人であり、人生と生命を詠う詩人であつたのである。

〔六〕 結語

本稿では白詩一般に認められる説理的抒情性について、特に詩題と詩句に現れる「理」と「知」の用法を中心に系統的な分析を行つてきた。白居易は「達理」「眞理」「生理」「此

理」「通理」「道理」「物理」「常理」……など實に多様な形で理を詠っているが、概してそれらは揺れ動いて定め難い情を安定させるために援用されている。生來の多情多感を知的に統御する手段に理が導入されているのである。彼はいわゆる哲理の思想家ではなく、情理の詩人であつたと言える。そしてまたこれは、その作品に處世のあり方や人生の意義を追求する性格を帯びさせることになる。自己確認を表す「始知」「乃知」……の諸表現も、抒情と説理が交差する詩情のなかで、必然的に使われるようになったと考えられる。全ての現象には原因や理由があり、それらを一つ一つ確認し解明しながら、自分の生の道程に適用していく。彼の詩作はまさにその実践の場として存在したのである。

對他的で公なる情理を詠う諷諭詩、對自的で私の情理を説く閑適詩・感傷詩は、白居易文學の大きな峰である。そこで展開される理は、儒家・道家・佛家・雜家・史書・醫方書から前代の文學者の詩文まで、極めて廣い分野から採集されている⁽¹⁾。そして人生の折々に、自ら納得し共感した理だけが自由自在に切り取られ、作品の内に嵌め込まれていく。白居易は、杜甫や韓愈のように特定の思想や理念を墨守して生きた知識人ではない。儒佛道三教をバランスよく同時に取り込み、

様々な領域の知を取捨選擇し、そこからしなやかで勁い自分独自の理を次々と創成していったと言ふべきであろう。

「念金鑾子二首其一」には「始知骨肉愛、乃是憂悲聚。唯思未有前、以理遣傷苦」とある。娘を亡くした父の悲嘆は、この子が生まれていなかった時空を敢えて設定することで、薄められ弱められている。この理は白居易によつて新たに創造されたものであり、彼の目指した詩境をも見事に象徴している。この詩人が信仰にも近い絶對的な信頼を寄せることができたのは、情と理を自在に盛る器としての詩歌——詩的言語——そのものであつたのである。中唐詩にしばしば認められる説理的抒情性は、白居易を極地にして次の宋代の詩人達へ確實に繼承されている。

〔注〕

(1) 陶詩に現れる「理」については、次の七例が挙げられる。「形影神并序、形贈影」(常理)「同前、神釋」(萬理)「五月旦作、和戴主簿」(人理)「移居二首其二」(此理)「癸卯歲始春懷古田舍二首其一」(卽理)「雜詩十二首其八」(理也)「感士不遇賦并序」(其理)。

(2) 杜詩に詠われる例としては、精理・理愜・生理・妙理・物理・理玄・造化理・文選理・理然・浮生理・茲理が指摘できる。

- (3) 「兵衛森畫戟、宴寢凝清香。海上風雨至、逍遙池閣涼。煩疴近消散、嘉賓復滿堂。自慚居處崇、未覩斯民康。理會是非遣、性達形迹忘。鮮肥屬時禁、蔬果幸見嘗。俯飲一杯酒、仰聆金玉章。神歡體自輕、意欲凌風翔。吳中盛文史、羣彥今汪洋。方知大藩地、豈曰財賦疆。」（郡齋雨中與諸文士燕集・『全唐詩』卷一八六）「晨登西齋望、不覺至夕曛。正當秋夏交、原野起煙氛。坐聽涼颿舉、華月稍披雲。漠漠山猶隱、灑灑川始分。物幽夜更殊、境靜與彌臻。息機非傲世、于時乏嘉聞。究空自爲理、況與釋子羣。」（秋夕西齋與僧神靜遊・『全唐詩』卷一九二）。
- (4) 陳友琴『中國古典研究資料彙編 白居易卷』（中華書局・一九六五年六月）及び堤留吉『白樂天研究』（後篇、第七章、白詩評價の諸相）（春秋社・一九六九年）を参照。
- (5) 「燕燕于飛、差池其羽。之子于歸、遠送于野。瞻望不及、泣涕如雨。燕燕于飛、頡之頡之、之子于歸、遠于將之。瞻望弗及、佇立以泣。燕燕于飛、下上其音。之子于歸、遠送于南。瞻望弗及、實勞我心。仲氏任只、其心塞淵。終溫且惠、淑慎其身。先君之思、以勗寡人。」
- (6) この點についてはかつて詳しく論じたことがある。小稿「白居易の數字表現について―修辭技法と心象構造」（『中國文學研究』第三十六期、早稻田大學中國文學會、二〇一〇年十二月）「再び白居易の數字表現について―陶潛・李白・杜甫と比較して」（『中國文學研究』第三十七期、同前、二〇一一年十二月）を参照。
- (7) 本稿では、詩題・詩句に「理」字を含む作品を狹義の説理詩（白居易「念金鑾子二首」が意味するもの（埋田））と規定し、それ以外で何かしらの説理的要素を持つものを、廣義の説理詩として用いる。ここでは考察の中心を前者に置いているが、白居易における膨大な説理の詩句は、むしろ後者の内にあると判断している。
- (8) 詳細は松浦友久『中國詩歌原論―比較詩學の主題に即して』（七、詩と詩型）「中國古典詩における詩型と表現機能―詩的認識の基調として」（大修館書店、一九八六年四月）を参照。
- (9) 白居易の次女である阿羅（羅子）の誕生は、元和十一年（八一六）四十五歳の時である。この點に關連して平岡武夫『白居易―生涯と歲時記』（第二部、白居易の家庭環境に關する問題）（朋友書店、一九九八年六月）では、「白居易は、阿羅の後に、江州時代に女の子をもうけている（No.1087）。また元和十五年（八一六）に三歳の女の子があつたことも、彼の詩（No.1175）に見える。しかし、これらの子の成長を述べる記録はない。極めていといけないうちに、あの世に行つてしまつたのであろうか」と述べる。白居易傳記研究上の大きな謎である。
- (10) 「……我知言。我喜養吾浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。其爲氣也、至大至剛以直、養而無害、則塞于天地之間。其爲氣也、配義與道、無是、餒也。是集義所生者、非義襲而取之也。行有不慊於心、則餒矣。……」。
- (11) 芳村弘道「老いを生きる白居易」三七五頁（『文藝論叢』第六十八號、二〇〇七年三月）の指摘に據る。詠老詩に特化した論考であるが、併せて参照されることを希望する。
- (12) 類似の指摘は『白居易研究 閑適の詩想』（本論Ⅱ）衰老と疾

病、「白居易の白髮表現に關する一考察」(汲古書院、二〇〇六年十月)にもある。併せて参照されたい。

(13) 大和九年(八三五)六十四歳の十一月二十一日に長安城内で起きた「甘露之變」を題材にした白詩唯一の作品である。

(14) 朱金城『白居易集箋校』(全六冊)(上海古籍出版社、一九八八年十二月)、謝思煒『白居易詩集校注』(全六冊)(中華書局、二〇〇六年七月)の各詩注釋に據る。

(15) 注(4)所掲の堤留吉『白樂天研究』「前編、第四章、思想」蹇長春『白居易評傳』第七章、白居易の後期思想——知足保和的中庸主義」(南京大學出版社、二〇〇二年五月)、同前『白居易論稿』「上篇、生平與思想」(敦煌文藝出版社、二〇〇五年八月)、肖偉韜『白居易生存哲學本體研究』「第一章、第七章」(南京大學出版社、二〇〇九年十二月)を参照。

* *

作者：埋田重夫

Author: Umeda Shigeo

標題：白居易《念金鑾子二首》的意義——以“理”與“知”的用法爲中心

Title: Significance of Bai Juyi 白居易's Two Poems titled 'Nian jin luan zi' 念金鑾子: with the Usage of 'Li' 理 and 'Zhi' 知

摘要：對於生來喜好議論的白居易來說，其詩文是用來抒發自己搖擺不定的感情，說明正確應行的道理，再次確認自己人生定位的。本論文重點討論其詩歌中顯著存在的說理性抒情所包含的意義。首先討論的問題是，以元和八年

(八一三)其四十二歲丁母憂期間所作的五言古體詩《念金鑾子二首》爲對象，先說明其在結合抒情與說理時的特色，然後重點對白居易所有詩歌作品中出現的“理”和“知”進行分析。在前人的研究成果基礎上，針對每篇作品中所涉及的“理”的情況進行詳細考察，並對其詩中情理的融合是如何生發出白居易式的詩情和詩境，以及在文學史上有何意義，闡述作者的見解。

關鍵詞：白居易 中唐 說理性抒情 詩情 詩作 思索 自我確認